体 育 學 研 究

第 2 號

昭和 26 年 11 月

MIZUNO. T., Concerning Aristotle's Idea of Physical Education.
—The meaning of the Aristotle's "gymnastikē"—

ア リ ス ト テ レ ス の 体 育 思 想

——ギムナスティケーの概念構成——

東 京 大 学 水 野 忠 文

(1) 序言——課題と方法

アリストテレス (Aristoteles, 385~322, B.C.) がその師プラトーンと共にギリシヤ的知性の最大の代表者であることは哲学史上明らかなところである。この課題はその体育思想を把握することである。そこで先づこの資料となるべき著作についてみるに、今日我々は大小20数篇の多きを手にし得るのである。然し体育を主題として論じたものは僅かに *Politica* (国家学) の教育論の一部だけであると言えよう。所がこれはその著作の意図からの当然の制約をうけている為に必ずしもアリストテレスの体育思想の全般を示すと言えない。従つて我々はなお他の諸所に散在している体育に関係した断片的知見を拾わねばならなくなる。然しこれは予想以上に多く又興味深いもの (註1) が少くないのである。

そこで我々がアリストテレスが体育を如何に考えていたかを正しく把握せんとする時、自ら採るべき方法は「表現」から「表現せられるものへと遡る方法、即ち個々の表現 (断片的知見) からそれが表現せられたもとの全体的なもの (体育思想) を構成的に把握する解釈学的方法と *Politica* の如き体系的な思想から体育に関するものを抽出して把握する方法とであらねばならない。

かくの如く資料の性格から帰結する方法を採る時、次に決定すべきは課題に対する問題解明の順序・構想の確立と云うことである。我々はこれを次の如く要約する。第一の問題はギムナスティケー (註2) とは如何なることであるかの問題で、その存在性を論理的に規定する。即ちギムナスティケーの概念を構成することである。第二はそこで捉えられたギ

註1 体育に関係のある断片的知見のうち興味ある1例を示すと『『ギムナジウムの苦しい修練に断乎として耐える人は哲学が要求する辛苦をよろこんで愛し迎えるようになるであらう』この種の推測によつて我々は人のよき性質をより明確に示すことになるであらう。』(Rhetorica ad Alexandrum, 1441 a 9, 35)。

註2 ギムナスティケーは通常体操又は体育と訳されているが厳密に言えばこれらには相違があり、これは後述する(7)において明らかにされる。

ムナスティケーが如何にして歴史的世界において十分にその具体性を以つて展開されるかと言う体育理論の問題であり、これはアリストテレスの理想国家建設の方策としての教育論の中にみられるものである。そして方法としては前者に対しては解釈学的方法が、後者に対しては前述の意味の抽出法が採られるのである。かゝる構想に立つ時、この課題は自ら二分されることになる。本論文においてはこの第一のギムナスティケーの概念構成の問題のみを取上げることとする。

(2) 考察の端初としての身体^{アルケー}

本論の課題は既にのべた如くアリストテレスのギムナスティケーの概念を明らかにすることであるが、その為には我々は如何なる点から考察をはじめめるべきであるか問題となる。然し出発点は我々にとって判明なことからであるべきであり(註1)、体育が身体をよくする為の活動たることは最早自明なことであるから、我々はアリストテレスが身体をどの様にみていたかと云うことから出発しようと思う。そこで我々は先づ「幸福の要素としての身体的卓越性」を取り上げこれを手懸りとして考察を進めたいと思う。

(3) 幸福の要素としての身体的卓越性

我々はこの問題に関する適切な所論を *Rhetorica* に見出す。そこで幸福の4つの定義とその12の要素が示される。即ち先づ幸福(*eudaimonia*)は

- (1) 徳と結合した繁栄
- (2) 生活の独立
- (3) 最大の快樂の確實なる享受
- (4) 己れの所有物たる身体を保護し、それを使用する能力と結びついた所有物や身体のよき状態

と定義され、幸福はこの4者の1つ又はそれ以上のものであるとされる(*Rhet.* 1316 b 14~18)。次にこの定義から12の構成要素が導出されて来る(同上 1360 b 14~24)。即ち

- (1) よき血統 (2) 友人の多きこと
- (3) よき友達 (4) 富
- (5) よき子供達(「よき」と云うことは身心の卓越性と説明されている)。
- (6) 子供の多きこと (7) 幸多き老齡
- (8) 健康・美・体力・立派な体格・競技能力等の身体的卓越性
- (9) 好き評判 (10) 名誉
- (11) 幸運 (12) 徳(註2)

所で身体的卓越性は更に次の様に説明される。先づ健康は病氣から解放されていて、身体を自由に使うことが出来ることである。次に美は人生のそれぞれの時期によつて意味する所が異なる。即ち若年者にあつては美は走つたり力業の競争の努力に耐える身体をもち、見るからに喜ばしきことを意味する。従つてオール・ラウンドな競技者は最も美しい。それは自然に力の競争とスピードの競技に適しているからである。壯年者の美は戦務遂行に対する適応性のある事であり；老年者のそれは為すべき必要なことがある時、これを為しうるだけの体力的強さがあり、且つ他人に対して苦痛の原因となる不自由さからの自由であることにある(ここで身体美は有用性からのみ論ぜられているが、ニコマコス倫理学では「美はやはり立派な身体を予想し、小柄な人々は典麗であり均齊的であつても美しくない……」と云つて居り、ここでの分類の第四の立派な体格にこれを認めている様である)。第三に体力は他人を思う様に引づばつたり、押したり持ちあげたり、抑えたり、握えたりする力である。第四に立派な体格は背丈・太さ・幅に

註1 アリストテレスは探求にあたつては「いつも我々は明白に判つていること即ち判明(*gnorimon*)から出発しなければならない。」(*Ethica Nicomachea*, 1095 b 1)と言つているが、我々もこゝではこのグノリモンから考察を始めるのがよいと思う。

註2 徳は精神的卓越性であつてその形には正義、勇氣、節制、壯麗、寛大、自由、溫厚、慎重、知慧がある(同上 1366 b 1~2)。

において自分の動作が緩慢にならぬ程度において普通人を超えることである。最後に競技能力の卓越性は力や速さで競争相手を打ちまかす能力のあることである（以上は同上 1361 b 3~28）。身体的卓越性は大体以上の如く明確に説明されたが、「幸福の構成的要素」と云うことは他所で次の故にも述べられている。

「もとより人間である以上は外的な好条件(euemeria)をも要するであろう。なぜならば我々の本性はテオリヤ(観想)の目的の為に自足的であるのではなく、やはり身体が健康であることも食事その他の世話も与えられていなければならない」。(E.N. 1178 b 33~35)

と。先の説明で健康は身体的卓越性として幸福の要素と考えられたが、これによつて身体のよき状態即ち健康は人間の究極的幸福であるテオリヤの好条件と考えられたのである。アリストテレスの考える人間生活のうちで他の為のものとなることなく知ることそれ自身に目的がある故に最も自足的であり、従つてそれ故に最も上位の生活と言われる知的な哲学的思索の活動であるテオリヤにおいて身体の卓越性がそのよき条件として認められたことは、当然の事とはいえ、身体の人生に対する意義を正しく捉えたものとして注目しておくべき点であると思う。

(4) 体育活動の結果としての 身体的卓越性

次に我々は以上の如き身体的卓越性とギムナスティケーとの関係を考察しなければならない。そこでアリストテレスがギムナスティケーを如何なるものとしていたかを知る為に次の2個の表現に注目する。即ち

①「以下は行為の結果の例である。身体は^{ギムナスティケー}を好むことの結果であり、人はそれに対して注意をしない結果不健康におちいる」(Rhet. ad Alex. 1426 a 9)。

②「健康と体力を与えるギムナスティケーの

如く……」。(Pol. 1338 a—20)

においてアリストテレスは体育を以て健康や体力と云う如き身体的卓越性を結果(ergon)として作り出す活動であるとみていることが理解される。而してアリストテレスによると活動(energeia)は次の2種に分類される。

「活動それ自身が目的である場合があり、これに反して活動以外の何らかの結果が目的である場合がある」。(E.N. 1094 a 3)

と。我々はこの2つの引用よりしてギムナスティケーは目的が結果にある活動の範疇に属するとみるべきである。従つて我々は(この2つの表現)で「ギムナスティケーは身体的卓越性^{エルゴン}を結果^{エネルゲイア}として作り出す活動である」

と解することが出来ると思う。

(5) 身体倫理とギムナスティケー

我々は以上の如く身体的卓越性を体育活動の結果とする見方を捉えたがギムナスティケーは別に倫理学的観点からみられた所がある。我々はいくつかの表現として次の言葉を引用することが出来る。「本性的に醜き人々を誰も批難しないが、ギムナスティケーの不足とか不注意にもとづく醜い人々に対しては我々は非難する。虚弱や不具についても同様である」。(E.N. 1174 a 24)

この言葉は既に引用した Rhetorica ad Alexandrum 1426 a 9 の言葉と同じ意味合いのものであるが、その観方が倫理的である。行為の端初が自己の力の範囲内にある場合は、することもしないことも出来るから随意的であり、強制や無知と違つて各自の責任である。従つて自己の意志の選択可能の範囲内のことを自己が怠つた時、非難をうけるのも当然である。それは己れの身体に対する自己の関わり方には一定のあり方があるべきであり、又実際にあるのである。そのあり方は身体倫理

と言えるものである。この身体倫理の故に後に(8)の2)に述べる如くギムナスティケーが配慮としての重大な意義を獲得するのであり、我々はこの意味においてこのギムナスティケーに関する倫理的批判の例証を重視しておかなければならない。

(6) 快樂の享受とギムナスティケー

幸福は既述の4種の定義の第三において最大の快樂の確實なる享受とされたのであつたが、幸福の楽しみ の側面に対して体育のもつ意義が考察されなければならない。それは先づ Rhetolica の次の箇所に見られる。即ち

「勝利は嬉しい。それは敗者にとつてのみならず、すべての人にとつても嬉しい。勝利者は自らを優勝者と云う光の下に眺めるし、すべての他の人も多かれ少なかれ、そうあらんことを望んでいる。勝利者の喜びは競争においては誰かに勝つと云うことがある故に嬉しいのである。勿論それには競争的なスポーツと知的な競争とがあるが。又同様に手玉遊び・球戯・サイコロ・西洋碁の様なゲームにおいてもそうである。危険を伴うスポーツでも同様で、これに慣れた場合はたのしくなる。なぜならば競争する時には勝利があるから」。(Rhet. 1370 b 32—1371 c 02)

かくアリストテレスは競争における勝利が心理的な愉快さをもつことを捉えていると言えよう。又同時に競技(アトロロティケー)がかかる心理的な情緒に根拠の1つをもつていることも理解出来ると思う。

かかる心理的な愉しさに關して尙他の引用すべき箇所がある。それはニコマコス倫理学の親愛(Philia)の所である。

「さればこそ或る人々は共に飲み、他の人々は共に双六をし、他の人々は共に競技や狩獵を行つたり、或は哲学の研究を共にしたりする……」。(E.N. 1172 a 4)

この様に我々の生活に必須かくべからざる親愛の徳を友人間に成り立たしめる媒介者として、かかる媒介者は沢山あるであらうが、競技がその一役を果していることが示されている。運動競技は誠に興味あることであり、今日の概念を以てすれば、学校体育ならば正に課外体育の、又広く社会体育ならばレクリエーションの役割の1つを示したものとみられるであらう。かかることの可能な根拠の1つはそれがもつ心理的な愉しさであると言えようかと思う。

(7) ギムナスティケー・アトロロティケー・体育の三概念間の相違

さて我々は(4)において考察した如く、活動を目的が活動自体にあるものと、それが結果にあるものとに区別し、ギムナスティケーは目的が結果にある活動として規定されたのであつた。それでは以上(6)において引用した所にみられるアトロロティケーは如何と云うに、嬉しいのは競技活動をすること自体にあつて、競技を終了した後に愉しさが生じて来るのではない。即ち勝利は競技活動の最後の瞬間に成立し競技終了後にそれが生ずるのではない。そこでこの点からみる時自らギムナスティケーは目的が結果に成立し、アトロロティケーはそれが活動自体にあることが、従つてこの2つの相似た活動の相違点がここに即ち目的實現の時間的相違にあることも了解出来るのである。然して我が国の今日の「体育」なる概念は少くともスポーツを教材として大きく導入したことからしてもこの種の両活動をもつたものであり、更に広く生理学的・衛生的・健康教育的な知的教育をも含めたものと考えるべきであり、ここにギムナスティケー・アトロロティケー・体育(註1)の3概念の意味を区別することが妥当であると言えよう。

註1 この点に関しては拙論プラトーンの体育思想(体育学研究第1号5頁)を参照されたい。

(8) ギムナスティケーの概念構成

以上によつて我々はギムナスティケーが身体的卓越性を結果において実現する活動であり、目的が活動自体にある活動即ちアトロティックと相違する概念であることを理解した。そこで更に立入つてギムナスティケーの概念を明確に規定しなければならない。

1) ギムナスティケーの二重性格 (テクネーとエピステーメ)

第一に健康や体力はギムナスティケーにおいてつくられるが(勿論かゝる種類の活動に医学があることは言うまでもないが)、それらは無論自然によつて(physei)生成するのではなくて、人工によつて(technē)生産されるのである。即ち技術的に生産されるのである。自然や偶然によらない生成は制作(poiesis)と呼ばれる(Met. 1052 a 31)。従つてこれは技術による制作と考えられる。所が技術は

「理論の正しき過程を作つた制作可能状態」。(E.N. 1140 a 10)

と定義されている。この理論の正しき過程とは論証可能な状態であり従つて学問・科学的知識(episteme)に外ならない。従つて「ギムナスティケーは科学的知識に基いた技術的制作」と考えなくてはならない。それは従つてギムナスティケー・エピステーメ(即ち体育学)とギムナスティケー・テクネー(即ち所謂体育)の2者を同時に含んでいなければならない。この事は既に翻訳の際に二様の訳語のあることから実証される。ギムナスティケーは通常体育(従来は体操と訳されたが)と訳される外、例えば次の如く体育学と訳されている所もある。W.D. Ross, *Ethica Nicomachea* 1096 a 33 のにおいて「運動における適度は体育学“the science of gymnastics”によつて研究される」^{ギムナスティケー}とあり、又 H. Rackham の *Politica* の英訳の 1228 b 18 のにおいて「どんな^{ギムナスティケー}な体育運動が最大多数の者にとつて最善であ

るか(これは体育学“gymnastic science”)の問題である)」。とある如きはこれを示すと言えよう。かくして我々はギムナスティケーの概念の二重性格を先づ認めなければならないと思う。

2) プロネーシス(配慮)としての ギムナスティケー

次にギムナスティケー^{プラクシス}を行為的側面から考察する。それは我々のギムナスティケーに対する関り方の問題である。これは既に(5)の身体的倫理と^{ギムナスティケー}体育において述べた所に関係するが、そこで引用した「体育愛好の故の健康の獲得と体育を怠つた為の不健康の召来」(Rhet. ad Alex. 1426 a 99)や「体育不足の為の醜さに対する世人の非難の正当さ」(E.N. 1114 a 25)の意味する所はギムナスティケーに対する我々の配慮(phronesis)、とその実行の適否である。配慮は「自己に対してよくあり又便益あることについて十分熟考することが出来る能力」であり、又「それも部分的に、例えば如何なるものが健康とか体力のためによいかではなく、総じて如何なるものがよき生に貢献するについて熟慮出来ること」である(E.N. 1140 a 25~28)。従つて何が体力によいかはむしろギムナスティケー・エピステーメが答えるのであり、よき生に対しては身体的卓越性はその好条件となるから、これを結果として制作するギムナスティケーはよき生に貢献すると考えるのは正に配慮である。故に各方面に対して配慮は数多くあるから、かゝる側面に関するそれを我々は已れの身体へのよき関わり方としての配慮としてギムナスティケー・プロネーシスと呼んでもよいと思う。かくて我々はギムナスティケーの第三の側面としてプロネーシスを把えることが出来た。先の例の体育不足の為の醜さに対する非難の根拠は已れの身体への関わり方の不適當・配慮の仕方の不適切さ即ちギムナスティケー・

プロネーシスの欠如にあつたと云えるであらう。

かく ギムナスティケーはプロネーシスたる面においてそれがもつ知即ち実践知が単なる知一般と必然的に「あり方」を異にする。

「軽い肉は消化がよく健康によいと云うことを知つていても、如何なる肉が軽いかを知らなければ健康を生ぜしめることは出来ない。それよりは 雛鳥の肉は軽くてよいと云うことを知つている人の方が一層身体に健康をつくり出すことが容易であらう」。(E.N. 1141 b 17)

と云う所をみれば配慮は実践的・個別的・具体的なることが要求される。従つて

「我々は医療や体育を知つてゐることによつて必ずしもその実践的傾向を増す訳ではない」。(E.N. 1143 b 26)

と云う所の医療や体育を知る知り方と配慮のそれとは異なるものであることが了解されると思う。

以上の如くして我々はギムナスティケーの三面を考察して來たのであるが、最後にこの者相互間の関係とギムナスティケーの眞の本質を問わねばならない。

3) ギムナスティケーにおける学問・

技術・配慮の構造聯関

第一に3者相互の関係は如何と云うに、こ
エピステーメ ナクネ プロネーシス
の学問・技術・配慮の3者が単に別々のものとなつて寄木細工式であつてはならない。3者は相互に依存し、協力し融合し合つた構造聯関であらねばならない。学問と技術とは相互に協力し合わねば眞に目的がよく制作されないことは前述した所より理解出来るであらう。配慮と学問との関係は *Metaphysica* 第1巻第1章より次の如く考えることが出来る。

「実践的行為の上では経験は決して理論に劣るものではなく、寧ろ経験家は経験なき理論家よりも正しい場合が多い様だ。」として経験の有効性を十分認めながら、「経験家はそうあることを知つてゐるだけで何故さうかと云う

ことを知らない」と云つて経験家の知的限界を示し、「何故かと云う理由を知り、原因を知る理論家」の力をかりねばならぬ所以を指摘している。経験は個別的であり、又有力ではあるが原因や理由を掴んでいないところに知的限界がある。よき生への配慮を基礎として考える時、我々はこの個別知に甘んずることは出来ない。配慮はギムナスティケーの技術をして絶えず学問を即ち普遍的なる理論を要求し、原因や理由を知れる普遍的判断即ち理論の教示を追求せしめると考えなくてはならない。

(9) 結 語

かくして我々は以上考察し來つた所を綜合し、結論としてギムナスティケーの概念を次の如く言うことが出来るであらう。即ち

『ギムナスティケーはよき生への貢献を配慮してその構成的要素又は好条件としての身体的卓越性を結果としてつくり出すところの、学問に基礎をもつた技術的制作活動である』と。

我々はこの様にギムナスティケーをその存在性に即して論理的に追求し今その概念規定に到達した。然しこの概念規定からも理解される如くこの活動の産み出す身体的卓越性は人生の究極的見地たるよき生即ち幸福へ構造的に連る所謂「目的の体系」(E.N. I, 2.)中にその位置を点めている。そしてアリストテレスは「単なる個人にとつてもその善の実現は好ましいが、民族や国家にとつてはそれの善の実現は個人の場合以上にうろわしく神的である」。(E.N. 1094 b 8)と云う個に対する全体の優位の立場をとる故に個人の善の実現も全体としての国家の善の実現と云うより大きな問題に包含される。それは正しく国家学の問題である。そこで我々は次の「教育の場における体育理論の展開」へ移行して論理的に把握したギムナスティケーの存在性を歴史的世界において考察し充実しなければならない。然しこれは序論において述べた如く第二の問題となるのである。よつてこれを以て第一の問題の考察を終らなければならない。